

新日窒本社に座りこむ

水俣漁協代表の34人

水俣病関係の被害補償金一億八千三百五十万一千円を要求して、吉岡新日窒社長との直接の話し合いを求めている水俣漁協代表三十四人は九日早朝から新日窒東京本社（千代田区丸ノ内東京ビル）前に座り込んだ。

松田組合長を代表とする交渉団はタスキ、ハチマキ姿で「新日窒は漁民のキセイで育った」などのプラカードやのぼりを立て、長グツに作業服のままといういでたち。この怒りを込めた表情には、おりから退庁するビル族も足をとめて驚いたようす。十一日に吉岡社長に面会を求めるといっている。

◇松田組合長の話 われわれは水俣工場に無償で土地を提供するなど工場を今日まで育ててきた。昨年の工場襲撃のさいも暴力行為はさけてきた。こうした

われわれの気持ちを知事あつせんでは、他の漁協とのバランスをとる意味でかえって不利になるだろう。あつせんに入る者が水俣市長が同市議なら納得もできる。会社は昨年九月に一時金三千五百万円と年間二百万円の汚水補償金は出したが、水俣病発生による被害の補償はない。二百十六世帯の漁民はその日の生活に困っている。われわれは死んでも交渉を成功させねば帰れない。みんながその決意だ。見通しのない交渉に、宿をとる

金もない。座り込んだまま倒れてもやり抜く。いのちがけであることは今後の交渉を見てもうえはわかるだろう。（東京支社）